

生涯教育研修活動報告書

一般検査研究班

- 1 実施日時：2023年4月25日 19時00分～20時00分
- 2 会場：Web開催 教科・点数：専門教科・20点
- 3 主題：炎症性疾患とバイオマーカー～血清LRGの可能性～
- 4 講師：福田剛（積水化学株式会社）
- 5 協賛：なし
- 6 参加人数：会員 134名 賛助会員 0名 非会員 0名
- 7 出席した研究班班員：
一般検査研究班：藤村和夫 室谷明子 柿沼智史 中川禎己 松本実華
渡邊裕樹 小針奈穂美
臨床化学研究班：永井謙一 巖崎達也 松重萌衣
血清検査研究班：山本晃司 飯山恵 森圭介

8 研修内容の概要・感想など

今年度最初の一般検査研究班主催の研修会を臨床化学検査研究班と血清検査研究班の合同でWeb環境にて開催した。

新規炎症性バイオマーカーとして保険収載された血清LRG (Leucine rich alpha 2 glycoprotein) をテーマに福田氏より講演がなされた。

講演の冒頭にIBD (Inflammatory Bowel Disease) の疾患と治療の概要について説明がなされた。IBDとは腸に炎症をきたす疾患の総称である。細菌や薬剤など原因がはっきりした特異的炎症性腸疾患と原因不明の非特異的炎症性腸疾患に分けられる。この非特異的炎症性腸疾患にクローン病や潰瘍性大腸炎が含まれている。臨床現場では主にIBDとは、クローン病や潰瘍性大腸炎を指すことが多い。クローン病の患者数は集計開始の1976年は128人だったが年々増加傾向にあり、2013年には39,799人まで増加した。10代から20代の若者に好発し、男女比は2対1で男性に多い疾患である。潰瘍性大腸炎の患者数も年々増加傾向を示し2013年には166,060人であり、若年者から高齢者まで発症し性差は見られない疾患である。どちらも、今後益々増加が見込まれる疾患である。

また、IBDは再燃と寛解を繰り返す疾患である。現在では、大腸内視鏡検査によるフォローが一般的であるが、今後、血清で測定できるLRGが有用だと説明がなされた。LRGはロイシンリッチリピート (leucine-rich repeat) ドメインを8つ含む糖蛋白であり、潰瘍性大腸炎、クローン病の活動期の判定

を補助するマーカーとして測定試薬が開発された。潰瘍性大腸炎において、臨床指標 (CAI ; Clinical Activity Index)、CRP 及び LRG の組み合わせで、活動期の判定補助に有用であることが証明され、クローン病においては、臨床指標 (CDAI ; Crohn's Disease Activity Index)、CRP 及び LRG の組み合わせで、活動期の判定補助に有用であるとのことだ。偽陰性の報告事例はないが、感染症、リウマチ等の炎症性疾患、一部の悪性腫瘍において LRG 値が上昇することがあるので注意が必要である。

最後に、LRG 測定試薬の性能評価に関して説明がなされた。試薬ブランク平均吸光度は 10mAbs 以下であり、感度 標準抗原 1 の吸光度は、試薬ブランクの平均吸光度に標準偏差の 2 倍を加えた値より大きい。正確性は測定期待値の 85~115%、同時再現性は変動係数 10%以下であった。偽陰性の報告事例はないが、感染症、リウマチ等の炎症性疾患、一部の悪性腫瘍において LRG 値が上昇することがあるので注意が必要であるとのことだった。

血清を使用し、各種汎用自動分析装置にて迅速に LRG 測定が可能になったことにより、IBD の診療ガイドラインが今後変更になる可能性が伺われた。現在、LRG の測定を行っているのは埼玉県内では 1 施設のみである。今後の普及に期待したい。

提出日 ; 2023 年 5 月 22 日

文責 : 藤村和夫